

(二)小池家の由来

私は明治四十五年六月十五日に、古手伝町四十番地で生れた。現在の安田町、北陸銀行橋北支店の東隣り、米田甚悦氏の西隣り、その真中の木村建設(株)の場所である。

当時は、間口五間半、奥行四十間程の敷地に、間口五間半、奥行十間位の本家兼店舗に接続して、廊下・台所及便所、別棟に離れ家及び土蔵があり、その裏に林場があった。

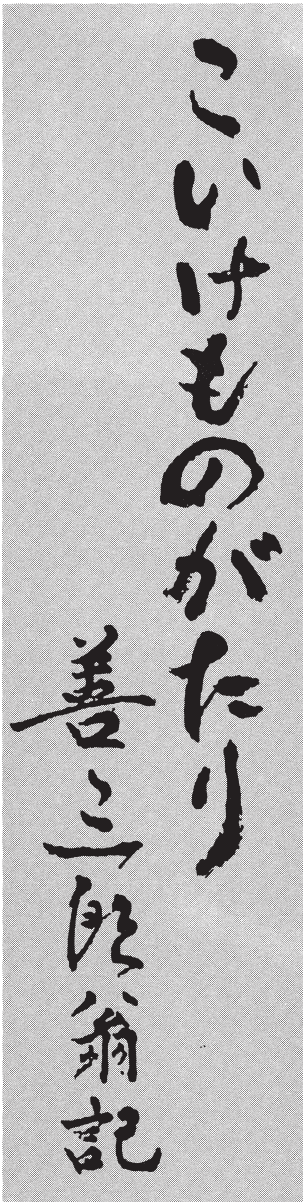
離れ家の六丈間は、祖父常太郎翁の隠居所になって居た。当時は祖母はるゑは、既に亡くなり、祖父は一人ぼっちだった。祖父は、隣室の三丈間の私を、よく呼んでお茶を酌み乍ら、小池家の由来、祖父の歩いて来た道、祖父の人生観等聞かされた。当時の私は、あまり興味が薄く、話より添物(茶菓子)を食べる方が目的だった。今日になってみると、より多く聞き、覚えておけばよかったと、後悔している。家系関係の古文書等も、あった様に、覚えているが、それ等関係のものは、戦災で全部焼失してしまった。祖父の口伝えを、左に列記してみよう。

一、小池家は、その先祖は、立派な武士で然も侍大将の未裔である、との事である。

二、明治三年に、一般平民が苗子(姓)をもつ事が許されたが、小池姓及び家紋の横木瓜(よこもつこう)は、昔から、口伝えで引継いでいるとの事。

然し姓及家紋は、昔は外部に公表を避けていたとの事である。

三、諏訪川原通りに、小池と名乗る菓子店、及愛宕神社正面前辺りに、小池某と名乗る家があった。良一兄及び私は幼少の頃、祖父母に連れられて、之



四、その昔、合戦で敗け戦となり味方が、散々になった。総大将土岐氏は、腹心の身内の者三、四人に支えられて、越中の国、中島村に逃れて来た。土岐氏は僧侶となり勝善寺の住職に、一人は一行寺を継ぎ他の者は農民となり、世を忍んでいたとの事である。

五、祖父の父音吉翁は、宮大工であったが、その先代は農民であり、当然平民だったと想像

等小池宅を訪問した事を覚えてい。何んでも、祖父母の二、三代前の、私の家の分家だったそうである。当然分家した頃は、徳川時代になると思うが、その分家二軒共、小池姓を名乗り、家紋も同一だった。これをみても姓は、昔から継承されていたとの事である。

出来得るが、婚姻関係、例えば、祖父常太郎翁の妻の実家(高石家)は土族であり、祖父の弟外次郎の養子先、山川家も土族であり亦私の父善蔵翁の実家野尻家も土族であった。今日の世代では、土族も平民も問題ではないが、徳川時代

分が違ふという事で、婚姻しなかつた。この事でも、想像出来得る様に、普通の農民ではなかつたとの事である。勝善寺現任職土岐幸隆師が、その系図及び先代から聞いている口伝えを、私が聞いた事によると、一、大阪城夏の陣に於いて、土岐氏の先祖鶴野兵庫守土岐教尚氏(九万石、大阪城、鶴の丸の責任者)は豊臣秀頼に仕え、秀頼と運命を共にした。二、当時、妻は懐胎中で、間もな

勝善寺(浄土真宗)住職となり、徳川方に気付かれない様前田家の縁故寺として、厚く保護されていたという。三、当時、土岐教尚の遺子、兵太郎氏(二才)に随行してきた側近は、僅か七、八名に過ぎず、現在中島の、河崎皓之氏(現、日清製油取締役)の家で草履を脱いたと、伝えられているとの事である。

左記の家系図は、良一兄、勝善寺先代住職・土岐隆貫師に調査を依頼し、寺の過去帖より抜萃して作成して頂いたものなり。その勝善寺本堂も、大正七年十二月三十一日焼失しているので以前の古いもの不明との事。

勝善寺再興後、土岐家は現住職土岐幸隆師が第十五代とすると、初代土岐氏に随行して来たと称せられる私の先祖から連想して、小池家も十四、五代になると想像出来るが、徳右エ門以前の事は不明なり。

徳右エ門——権太郎——善五郎——乙吉——乙吉——音吉——常太郎——善蔵

天明3年没(※天明7年は徳川家斉11代將軍となる) 明治20年没 昭和6年没 昭和20年没

